

第Ⅲ部 まとめ（要旨）

佛教大学教育学部 准教授 菅原伸康



この一年間、授業を見せてもらうなど何かしらの形で間人分校と関わりを持ちました。本日の生徒さんの発表を聞いて、また先生方の報告を聞いて、それと事前に手にしている資料に目を通して、私なりに間人分校の取組についてのまとめをします。

間人分校は、3つの研究課題をあげています。一つ目は、発達障害またはその可能性のある生徒に対する教育支援と計画的・組織的なキャリア教育の推進、二つ目は、ユニバーサルデザイン化と生徒のコミュニケーション能力・社会性の育成を重視した柔軟なカリキュラムの運用、三つ目は、特別支援教育に係る教職員・保護者等の研修の充実と地元企業等地域への啓発的な情報発信です。

これらの課題に沿って、気づきアンケートや短歌講座、茶道体験、あるいは清掃ボランティアなど、一年間、学校の内外でさまざまな取組を行い、4年間のスパンの中で子どもたちの自立を促す機会を提供してきました。コミュニケーションの力や人と関わる力、そして社会に出るために必要になってくる交渉力、最近では、発達障害・自閉症に係わって、交渉型のコミュニケーションということが言われるようになりましたが、生徒さんにそういう力を身につけさせる教育を進めました。また、こうした取組を充実させるために先生方のスキルアップも必要だということで、先ほど紹介のあった本学の学生と先生方との交流もそうですし、さまざまな研修を通して一人一人のスキルの向上に取り組んでいる。そして、それらを結集して、組織体としても活かすようになりました。あとは先進校の視察ですが、本で読むのではなく自分自身の目で見て確かめて、それらが教育の中味にも反映されて、子どもたちの力を伸ばしたのだと思います。

取組の成果と課題ですが、間人分校では、「認め合い育ち合う」と言っております。それをキーワードとして、お話しします。

成果の一つとして、子どもを見る目を養うことができたと思います。これは、3週間ほど前でしょうか、学生たちを連れて間人分校に来たときに印象に残った言葉ですが、交流の中である先生がこのような発言をされました。「子どもたちを変えるには、私たちが変わらなければならない。」これこそ、特別支援教育に携わる人間に非常に重要な視点です。すべての問題行動には理由がある。だから、行動と状況をセットにして「観察」することが重要です。その行動はどのような調整の行動か？どのような状況で増加するのか、減少するのか？先ほどの気づきアンケートもそうかもしれませんが、こうしたことを分析しながら子どもたちをしっかりと見ないと指導はできません。その目を養うことができました。子どもたちの指導に当っては、何よりも、その子どもの成長課題を押し返さることが大切です。その上で、子どもの土俵に降りて、そこで子どものしようとすることをよく見なければいけない。このことが、子どもの成長課題を克服させるためには、まず教師が変わらなければならないということとつながってきます。子どものしようとすることが、もっとよくできるように手伝おうとする。そういう視点が必要になる。子どもの動きに合わせながら、

子どもの気持ちを汲もうと努め、代弁の言葉、イメージの共有の言葉を添えようとしてみる。そういう関わり方をしておられる先生がいるとも聞きました。そうすると、教師は子どもの力を引き出し、基本的交渉力を装備させ、子どもが次の土俵に進むのを助けることができます。そうしながら、1年間あるいは4年間のスパンの中で、子どもの自立を促していく。こうしたことを行うための目を養いました。こういうことが土台になれば、何かを積み上げていくことはむずかしいでしょう。

関連して、「子育て」についてです。ここで「子育て」というのは、「ケア」と「エデュケーション」の2つの意味を持つ言葉として使いたいのですが、「エデュケーション」とは「教育」ですから先生方の本務です。「ケア」というのは、「お世話をする」とか「注意を共有する」という意味があることを前提にして話を進めます。「子育て」において、教師が児童・生徒を育てるのですが、実はその反対もあります。児童・生徒が先生を育てる。あるいは、親が子どもを育てるところでは、子どもに親が育てられる。つまり、大人は子どもと関わることで、さまざまな視座を得ることができる。教育の原点とは、教える者と教えられる者の「相互育ち」だと考えることができると思います。先生方は、自然とそういう考え方をするようになりました。

私も高校までは、お父さん、お母さんがいて、おじいちゃん、おばあちゃんがいる家庭で育ってきましたが、家族は、相互が関わり合って、相互に育ち合う最小の単位です。子育てを通して、家族のみんなが育っている。近代、家族はこの機能を犠牲にして、家族のそれぞれが効率的にふるまうことができるようになりました。産業革命以降、子どもは家内労働から解放され、同時に職業に係わる差別からも救われました。大人は保育所ができたことによって安心して働けるようになり、老人施設が充実することによって、一人暮らしの老人も安心して暮らせるようになりました。このような分業化が進むことによって、家族の関係に少しずつ亀裂が生じるようになったのではないかと思います。おじいちゃん、おばあちゃんには老人福祉施設、大人には職場、子どもには学校や幼稚園、保育所があって、それぞれの場所で上司から一方向的な指導がなされる。そういう中で各世代が機能的に行動できるようになったけれども、弊害として「相互育ち」の機能が失われていった。言い換えると、大人が育たなくなりました。その部分を復権していくという視点も必要なのではないかと思います。先ほど述べた亀裂というものをなくして、地域のさまざまな場所で、さまざまな人たちの間で、「相互育ち」ができる環境を作っていく。学校、保護者、行政、企業、それらすべてが同じ視点をもって子どもたちを育てていく。その中に、たまたま発達障害の子どもがいる。こうした思いも、間人分校の先生方は持っているのではないかと思います。つまり、世代別の機能追求を踏まえながらも、子育ての持つ相互育ちができる環境を回復させていくという視点をもつことができたということが成果です。これは、もう一方では課題にもなっていくわけですが、次年度以降これを発展させていく、もっともっと地域を巻き込みながら進めていく必要があるのではないのでしょうか。

次に課題ですが、大きく2つあげさせてもらいました。

一つ目として、自立についてもう一度考えながら、キャリア教育を整備し直すことが必要だと思います。先ほど、4年生から進路実現についての話がありましたが、生徒たちには自分から求めようとする社会への関心の育成、自分から発信できる技能学習が、そして周りには発信されたものを受け取る社会的基盤の整備が、土台として必要になってきます。

高校の4年間の中で、そのためのQOL（生活の質）を高めてあげることが大切です。まず挨拶や日常動作、身辺処理をしっかりと身につけさせる。そういうさまざまな取組が職業訓練にもつながってくるわけで、それを子どもたちが主体的に取り組むようにするにはどうしたらよいかを考えていく必要があります。先ほど、先生方の発表の中で「障害受容」という言葉が使われていましたが、私自身も、障害を克服すること、生きる喜びがどんどん増えるということがその子どもの成長と同義語であると考えていたところがあります。これは発達単線モデルであって、求められる力は自力解決の力です。もう一つの考え方は発達の社会参加モデルで、マザーベース、ファミリーベース、スクールベース、コミュニティベース、というふうに活動できる領域、安心できる領域を広げていく、こちらの方をもっともっと充実させる必要があると思います。この場合、必要な力は、他者の援助を受けながら社会参加をする力です。自力解決ができる力と援助を受けながら自立する力、この両方の力をつけてあげる必要があるのではないのでしょうか。これは発達障害があるからとかいうことではなくて、私たちはみんなそうです。社会参加をするときには、自力解決という部分と他者の援助を受けつつという部分とがあります。そこで発達障害の子どもは、どちらかと言えば他者からの援助の方が多いということはあるかもしれませんが。その部分で、4年間の中で障害受容、自己理解を確実にできるように支援をしていく、そういう視点が必要になると思います。そのためには4学年ある中で、異年齢での学びも取り入れた方がよいでしょう。1年生が4年生の背中を見ることによって「真似ぶ学び」をすることも大切だと思います。あとは、ユニバーサルデザイン化のところ、構造化という言葉が出てきましたが、社会に出るためには「脱構造化」に向かっていく必要も生じてきます。それをどのように教えていくのかという視点をもつ必要もあると思います。それには、互いの違いを認識し、いかに協同の活動を組めるようになるかというところを考えてみないといけない。それが相互障害の克服にもつながっていくわけですし、正に特別支援教育の理念はそこにあります。地域では、さまざまな方が生活しておられるわけで、その中で障害のあるなしに拘らず、お互いの違いというものを認識した上で認め合う、その上でいかに協同の活動をしていくためにはどうしていくのか、そういうところの視点が必要になってくると思います。

二つ目は、時間空間、社会関係空間というものがあって、その中で子どもは日常における活動の制限を受けています。それらを何らかの形で克服しながら生活をしようとするところで、社会関係の拡大が起きます。そこでボランティア活動とか社会制度の改革が行われるようになる。それと同時に、子どもたちは成長発達をするわけですから。その時々機能や構造上の変調により制限が起きてくる中で、それを克服していけば社会参加が可能になる。そのために、地域の中で、企業、行政、学校、保護者が上手に連携していくことが必要になってくると思います。学校だけが頑張ることができるというものでもないでしょうし、子どもだけが頑張ることができるというものでもないでしょう。やはり、地域の中でさまざまなところが力を合わせていってほしい。研究指定が終わったとしても何かしらの形で引き続き連携を図って、また次年度から新しく入ってくる生徒たちの成長発達というものにつなげてほしいと思います。

この1年間、関わりを持たせてもらって、私も勉強させてもらいました。これからもまた、いろいろな関わりを続けることができたらと思っています。